



## 倉橋惣二と私(2)

語り手 森上 史朗  
聞き手 浜口 順子

佐治由美子

\*前号に引き続き、特集「いま、倉橋と出会う」の森上史朗先生のインタビューを掲載します。

### ●見えない保育

佐治 森上先生のお話の中に「充実指導」ということがありました。先生の『子どもに生きた人・倉橋惣三の生涯と仕事(下巻)』(フレーベル館)のご本の中にブランコの例があります(P.68-69)。子どもがブランコに乗っている時に保育者がこいであげるので、「此の子として此の位まで行きたいといふところを指導する」のが充実指導であって、子

どもに「駄目だなあ、先生ならこの通り、天まで漕くぞ」と言つて無理に搖すつてやるのでは充実指導ではないと倉橋が書いていることを紹介されています。この指導は「隠れている」のでも、また「でしゃばつて」いるのでもなく、「子どもの内部に入つて、自己充実を内側から指導」する、いわば「見えない保育」とでも呼ぶのか、と書かれています。そこで森上先生にお聞きしたいのですが、「その先生の所在は、子供にも見物人にもちつとも目立たないでしょう。それでいいし、それでこそ、ほんとうなのです」という倉橋の文章の中に登場する「子供」について

です。この「子供」とは、そこでこいでもらつていい子どもなのか、周りで見ている子どもなのか、そのところをはつきり知りたいのですが。充実指導を行っている先生のあり方は周囲にいる見物人には目立たないでしょうが、当の子どもには目立たなくとも見えているんじやないかと思つたりします。

森上 それはいろんな解釈が成り立つでしょうが、一つのとらえ方としては、その子自体ということですね。ただ、「廊下で」(『育ての心』(上巻)所収)にあるように、他の子どもには通じる、同じ気持ちになれるということはあります。でも、倉橋がそこで書いたのはあくまで、その子だろうと思います。

そういうことをやはりいまの保育者が、現場の保育を通して考えていく必要がある。私もいろいろな保育現場を見てきましたが、たとえば、吉村真理子先生(元松山東雲短期大学附属幼稚園教諭)の保育というのは本当に見えない。そのことをつかんでいらっしゃる。吉村先生の書かれた本(すぐ絶版になりました、本当にもつたいないのですが)には多くのよい

事例があります。これは、倉橋先生の充実指導のことだな、という事例です。同じ言葉を使っていても、具体的にイメージが描けないし、違うことをイメージしてしゃべっているかもしれない。だから誘導にしても充実指導にしてもそういう現場の実践事例を出しながら語つていかなければならないと思います。

浜口 見えないことを大事にするということは、最近、よく保育の周りで聞くようになりました。

森上 はい、津守先生の『保育者の地平』(ミネルヴァ書房)の中の内的発達というところで繰り返し出てきますよね。外からは見えていないところに子どもの側の発達があると。

浜口 でも、それをどのように具体的に考えるかでは、いろんな解釈があるようです。

森上 ええ。言葉の上ではみんな、見えないものが大事だと言っています。それを論議していく一つの手がかりとして、記録、エピソードをめぐってカンファレンスをやるのか、それともビデオのようなものでやるのか、もつとほかのものでやるのかという

ようなこといろいろな方法論がでてくるのではない  
かと思うんですね。

### ●『育ての心』から——「子どもの心のはだ」

浜口 今年の一月号から「いま、倉橋と出会う」という特集を組み、「育ての心」からいろいろな文章を引いて紹介してきました。フレーベル館の方から、「育ての心」の特に上巻がよく売れるという話を聞いたことがあります。前半のあの部分というのを、やはり読みたくなりますよね。

森上 わかりますね。上巻は保育の真髓が珠玉のような文に凝縮されている。それに比べて下巻はさまざまな視点の子ども論が雑然と並んでいるような気がします。でも津守先生から、自我の発達という観点から読み解くと素晴らしい示唆を与えられるといふことを教えていただいて、目からうろこが落ちる感じがしました。そういうことをどなたかが伝えてくださらぬとわかりにくい。○○の子、○○の子というふうに書いてあるんですけど、これはほと

んどが自我論として。

浜口 たしかにずいぶん上巻と違いますね。

森上 教員養成委員会などに出ると、幼稚園の先生の専門性というのがまだ理解されていない。一応そういう時は、カウンセリングマインドに近い

ものが中核だらうということになる。でも、いまにしてみれば、ドナルド・ショーンの「反省的実践家」なんていう理論がよく紹介されるのだけれど、そういうことは『育ての心』の中に皆入っている。つまり、一つには、いま言われているカウンセリングマインドのことがほとんど入っている。もう一つは「反省的」ということ。つまり、すべて自分を鏡にするということ。『育ての心』(上巻)にある「心のはだ」とか、「とげ」とかいうものは、評価ということは全部自分に帰つてくるものだと。「とげ」にも



“心のはだ”という言葉が出てきますよね。「とげ」の終わりのほうの文章に。これは倉橋惣三の特徴的な主張だと思いますね。

浜口 倉橋は、本当に大人に厳しいというか、大人としての自己省察でもあるのですが、辛らつなほどに大人のことを批判しますよね。この時代にこんなにも自己をほりさげるというか、これは本当に新しかったのではないでしようか。

森上 そうですね。倉橋のほうが、ドナルドショーンなどより先に反省的実践家ということを言つていてなんじやないかなあ。

浜口 倉橋は「省察」というまさにその言葉を、戦前の著書で使っています。本当にあらゆることが出てくるので、何か倉橋先生にまだ言われていなきことがあるからと思ふぐらいなのですが。

森上 本当に思想で



越えようと思ったら、もう越えられないだろうなって思うんですね。しかし、これから、保育については、いろいろな課題や懸念が来ると思います。国際的にはOECD(経済協力開発機構)でもStarting Strongという報告書の中で、「大人への準備」なんか「いまを生きる生活」なのかという論議が行われていますが、そういう時に新と真ということを改めて考えてみる必要がでてくるでしよう。

浜口 倉橋惣三の最初期の論文を『幼児の教育』のアーカイブズで、明治四十三（一九一〇）年ぐらいに書かれたものを読んでも、後のものの中でぶれていないことに驚きますし、さらに現代の中で再生しています。これからどのように新しく受け継いでいけるのか。倉橋のことはまだ充分研究されているとはいえないのでしょうか。

森上 はい。特に、どちらかというと保育からちょっと離れたような分野についてはまだ研究が行わっていません。その中で一つ大きなジャンルが児童文化なんです。倉橋の児童文化に関する論説がま

だ非常にたくさんあります。明治とか大正のもので  
あるにもかかわらず、何でこういう子どもの立場に  
立った論説が出てくるんだろうと驚かされます。

浜口 倉橋惣三という人は、こと保育学というジャンルに入るのか、子ども学というのでしょうか。ぐくりきれない広さを感じます。

森上 うん、子ども学でしょうね。だから、倉橋惣

三の研究は、保育史をやる人だけでなく、どちらかというと子どもや保育の現場とのつながりをもつている方にもっとやつていただきたいなと思つているんです。

浜口 研究する人の立場が違えば、倉橋先生の違う所に光が当たつていくわけですね。外国語に翻訳といふのもなかなかされないです、倉橋は。

森上 「育ての心」などは、結局俳句とか短歌とかそれに類するものを翻訳するようなことですからね。

## ●倉橋のアカデミズム

浜口 倉橋の著作の中で『就学前の教育』（倉橋惣

三選集第三巻 フレーベル館）は最も理論的なもの

の一つだと思うのですが、それでもかなり独特的の書き方ですし、読みやすいほうが先で、あんまり堅苦しい理論書という感じがしません。倉橋惣三は、その時代ではアカデミックな世界からは異端視されたのかもしれませんが、それが結局保育学を語る最善の方法であると考えていらしたのでしょう。

森上 われわれですると、これは現象学的に言えばこういうことだつて注釈の一つも入れたくなるんでしょうけれど、そうした専門用語は一つも入っていないでしょ。津守先生はそこを評価されている。倉橋がいまでも輝いているのは、当時の学問理論を用いず、子どもと交わつた時の感覚から出発して、児童本来の姿を明らかにしようとしたからであると。

佐治 倉橋先生はヨーロッパに行つて学ばれたのまさに直に現象学に触れられたはずですね。

森上 おもしろい事実がありますね。欧米へ留学されて、その後それらしきものはほとんど書いていな

佐治 紙芝居の研究を帰つてすぐに始められたり。

森上 農繁期託児所とか駄菓子屋の研究とかね。

浜口 コロンビア大学の幼稚園を見てきて、「なんだ、この程度のものか」と思つて帰つてきたという

ふうにも読めますよね。もちろん敬意や謙虚さはありますながらなのですが、日本では日本のやるべきことがあるというような自信のようなものが。

森上 倉橋先生のほうが考え方としては進んでいたんでしきうね。新教育といつてもそれが「型にとらわれていた」ということを言つていらっしゃいますから。

浜口 倉橋はいろんな幼稚園を見ていらしたわけですからね。さまざまな保育施設や福祉方面についても多くの論文を書いていらっしゃいます。貧しい人のための保育所や幼稚園のことなども。

森上 一時期はいまでいえば社会福祉でしようか、「社会事業」という雑誌などに論文をいろいろ書いておられるんですね。幼保一元化の原点のようなことも書かれていますしね。ただ立場上お茶の水の園

長になつたということで、当時としては日本の幼児教育を統括する立場にあつた。本当は日本の乳幼児全体のこと、全体の保育に関心があつたんだと思いますがね。

浜口 歴史の中で、戦争もあり、綱渡りのようにバランスの難しい時期にいらしたわけですからね。

森上 戦争に強力に反対しなかつたということですかなり批判がありますが、倉橋先生は幼稚園廃止論が強かつた中で戦争反対というようなことだけではすまない事情があつた、ということは私にはよくわかるということを、坂元先生がおっしゃっていました。

浜口 今日は本当にいろいろなお話を聞かせてください、ありがとうございました。

(子どもと保育総合研究所代表)

浜口順子・佐治由美子（お茶の水女子大学教員）

記録・金子未希（お茶の水女子大学大学院生）

\*特集「いま、倉橋と出会う」は今回で終了いたします。